自著を語る

柳原　三佳
ジャーナリスト

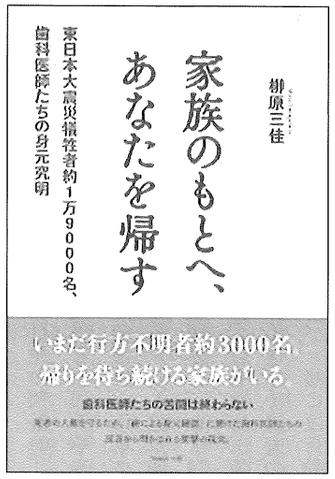
家族のもとへ、あなたを帰す

責任のない〝責任感〟のある人たち

「お医者さんは『亡くなっています』ということと『なぜ亡くなったのか』ということは言ってあげられますが、『これは誰なのか』ということまでは、たぶん特定できないと思います。それは、我々歯科医師の役目だと思うのです。

だから僕ら、遺体安置所でねばるわけですよ。ねばる理由はそこなんです。多分この仕事は、人間の一番最後の、尊厳という部分に関わっているのではないかと、今回は本当にそう思いました。」

これは、本書の「第5章〝原発下〟という戦場で」の中に収録した、福島県の歯科医師の証言です。



WAVE出版／2012年8月刊／223頁／定価1680円（税込）

2011年3月11日に発生した東日本大震災。1年経った時点での死者・行方不明者は1万9009人と発表されました。そのうち約1万6000人という膨大な数の犠牲者が、それぞれに身元を確認され、名前を取り戻し、家族のもとに帰ることができました。

けれどもその裏側で、数多くの歯科医師たちによって献身的な身元確認作業が続けられてきたことは、意外に知られていないのではないでしょうか。

「歯」は人の体の組織のなかでもっとも硬く、死体が焼けたり、腐乱したり、白骨化しても永く残ります。また、年月が経過しても、虫歯の治療に使用された金属などはほとんど変化しません。しかし、生前の歯科カルテとの照合を行うためには、遺体が埋葬される前に正確な歯科所見をとっておかなければなりません。

そのことを知っていた歯科医師たちは、震災と津波の混乱のなかで、いま自分がなすべきことは何かを模索し、何の法的根拠も、情報もない中で、被災地の遺体安置所へ向けて出動していきました。そして、硬直して固く閉じた遺体の口を、がれきに揉まれて傷ついた遺体の口を、炎に焼かれて炭化した遺体の口を、寒さにかじかむ手で開き、一体一体、丁寧に歯科所見を取り続けたのです。

彼らにそうさせたのは、最後まで残るであろう「歯」をよりどころに、なんとしても犠牲者の身元を明らかにして家族のもとに帰さなければならないという、歯科医師としての使命感でした。

本書は、その過酷な現場で遺体に向き合い、身元を確認するための闘いを続けた、さまざまな立場の歯科医師たちの証言を記録したものです。

「第1章　遺体の『歯』が語るもの」に登場していただいたのは、千葉大学法医学教室に在籍する女性の歯科法医学者です。彼女は震災の翌日、「ママ、死んじゃうの」と泣いて足元にすがりつく小学生のわが子を家族に託し、法医学者らとともに岩手県の陸前高田へと出動しました。

遺体安置所となった小学校の体育館には、トラックに山積みされた遺体が次々と搬送されてきます。普段から変死体の司法解剖に立ち会い、身元確認作業には慣れているはずの彼女も、これほど多くの遺体を見るのはもちろん初めてのことでした。電気も、十分な機材もない中、それでも時間の許す限り、黙々と遺体の歯科所見をとり続けたのです。

岩手県歯科医師会が身元確認作業で実際に使用した器具・器材

岩手県内でご自身も被災しながら、身元確認作業に出動した歯科医師の方々にも取材させていただきました。

「第3章　泥まみれのカルテ」に登場される釜石の先生は、医院が津波で壊滅的な被害を受けながらも、いち早く泥の中から患者の歯科カルテを拾い出し、1枚1枚洗って乾かしました。そして、復旧したレントゲンデータとともに持参し、遺体安置所に通い詰めました。信じられないことに、ご自身の医院の患者さんだけで、200名以上の方が犠牲になったそうです。

「この人もダメか……、この人もダメか……」

そう言いながら、遺体安置所で身元確認作業にあたられたときの体験談は、壮絶でした。

また第5章では、原発事故に揺れる福島の遺体安置所に駆け付けた歯科医師たちの活躍を、時間を追ったドキュメントのかたちで紹介しました。国や東電からの具体的な情報が全くない中、放射線量の高い遺体がどんどん運び込まれてきます。遺体の除染をおこなわなければ、身元確認の作業にすら移ることはできません。出動した歯科医師たち自身も放射能の危険にさらされながら、それでも現場に留まって歯科所見をとり続ける……。取材をしながら、全く知りえなかった彼らの活動を正確に記録しておかなければならない、そう強く感じました。

「東日本大震災における身元確認作業は、まさに『責任のない〝責任感〟のある人たち』に支えられてきました。岩手県で作成された27００枚にのぼるデンタルチャートは、まさにそうした歯科医師たちの誠実な作業の積み重ねなのです」

「第3章　泥まみれのカルテ」に登場された歯科医院の津波直後の状況

岩手県の身元確認作業で陣頭指揮を執られた岩手医科大学法医学講座の出羽厚二教授の言葉が印象的でした。

現在も約3000人の方の行方が分からないままです。そして、身元の判明していない遺体がまだ200体近くあるそうです。

今このときも、家族の帰りを待ち続ける人々が大勢いることを、私たちは決して忘れてはならないと思います。文